

飼料用米「たわわっこ」の多収・低コスト栽培のポイント

【1 「たわわっこ」の生育の目安と多収のポイント】

(1) 生育の目安：10aあたり700～750kgを確保するための生育の目安は以下のとおりです。

収量水準 (粗玄米収量) kg/10a	籾数 千粒/m ²	穂数 本/m ²	一穂籾数 粒	稈長 cm
700～750	34～40	285～300	120～135	85以下

(2) 施肥：

〈通常の施肥体系〉

【基肥】窒素成分で6～10kg/10a施肥します。

(例：窒素成分12%の肥料銘柄であれば、現物50kg～83kg/10a)

【追肥】幼穂形成期に、生育をみて窒素成分で2kg/10a以上施肥します。

(例：窒素成分17%の肥料銘柄であれば、現物12kg/10a以上)

〈追肥労力軽減を目的とした施肥体系〉

基肥として緩効性肥料(幼穂形成期中心に溶出)を使って、窒素成分で10kg/10a程度施肥します。(例：窒素成分24%の肥料銘柄であれば、現物42kg/10a)

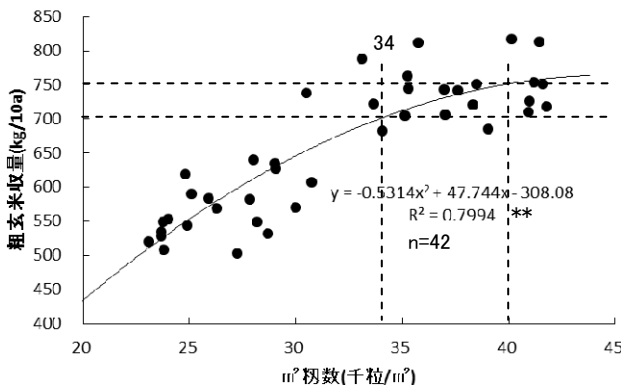


図1 m²籾数と粗玄米収量の関係

※H26～30の二戸、久慈、軽米現地、県北研データ

※**：回帰式は1%水準で有意

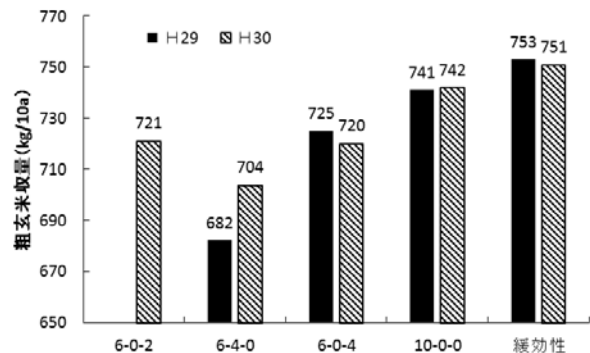


図2 窒素施肥量と粗玄米収量の関係

※H29、30の軽米現地のデータ

※N施肥(kg/10a)基肥 - 穂首分化期 - 幼穂形成期

※緩効性は幼穂形成期中心溶出、N施肥10kg/10a

【2 「たわわっこ」の低コスト栽培のポイント】

(1) 刈取り後の乾燥コスト低減(立毛乾燥技術)

出穂期後の平均気温を積算した値で1,100度以降にはコンバイン収穫が可能となります。また、1,400℃以降に刈取ると籾水分が20%程度まで低下し、乾燥コスト低減が期待できます。その時の脱粒もほぼありません。

【3 その他栽培上の留意点】

(1) 「たわわっこ」はやや穂数が確保しにくく、栽植密度を55株/坪程度で栽培した場合に減収した事例があります。70株/坪程度の栽植密度(条間30cm×株間16cm)を確保するよう植え付けをしましょう。

※参考文献：平成29年12月 農林水産省発行「飼料用米生産コスト低減マニュアル」

担当研究室 県北農業研究所 作物研究室

〒028-6222 岩手県九戸郡軽米町大字山内23-9-1 TEL. 0195-47-1073 FAX. 0195-49-3011